

研究成果情報

平成26年度

かき「突核無」の高接ぎによる早期収量確保技術		
[要約] かき「突核無」に品種更新する技術として高接ぎが有効である。先端新梢長が 30cm 以上の樹勢がある既存のかきの樹に対して、3m 程度の骨格枝 1 本当たり 8～12 口の接ぎ木を行うと、3～4 年後からは 10a 当たり 3 万果の果実が生産できる。		
新潟県農業総合研究所園芸研究センター 育種栽培科	連絡先	TEL 0254-27-5555
新潟県農業総合研究所佐渡農業技術センター		FAX 0254-27-2659
		TEL 0259-63-4102
		FAX 0259-63-3972

[背景・ねらい]

かきは植栽から結実まで年数がかかる樹種である。また「突核無」は栽培面積が少なく、産地化を進めるには栽培面積の拡大と早期収穫確保が急務である。そこで短期間で更新する技術により、農家の早期収益増大と現地への普及促進を図る。

[内容]

- 1 側枝の先端新梢長が 20cm 以下の樹に接ぎ木をしても収量は少ないので、側枝の先端新梢長が 30cm 以上の既存樹を更新用中間台として利用する。接木は 3m 程度の骨格枝 1 本当たり 8～12 口行う（図 1、2）。
- 2 苗木植栽より高接ぎの方が初期収量は大きく、生産目標である 10 a 当たり 3 万果は 3～4 年目で達成することが可能である（図 3）。
- 3 高接ぎに用いる接ぎ穂は、1 年枝の充実した芽が着生した部位を使う（データ略）。
- 4 高接ぎ 3 年目で樹冠の空間が埋まり、4 年目以降は新梢発生が少なくなる。枝が混雑する部分は日当たりが悪く枯れ込むので適宜間引きをする（図 4）。

[導入効果]

高接ぎ技術の有効活用により、新品種の早期産地形成が期待できる。

[導入対象]

県内のかき産地

[留意点]

- 1 接ぎ木方法は慣行の方法に準じ、5 月中旬までに実施する。
- 2 目標収量は露地の慣行栽培方法においては、平核無の基準収量の半分の約 1t/10a と設定し、1 果 30g から着果量を 3 万果が相当とした。
- 3 調査した樹は生理落果抑制のためジベレリン処理を行った。
- 4 「突核無」の生育特性は、「小果、種なし、高糖度で、まるごと食べられるかき「突核無」の特徴」を参照する。

[具体的データ]

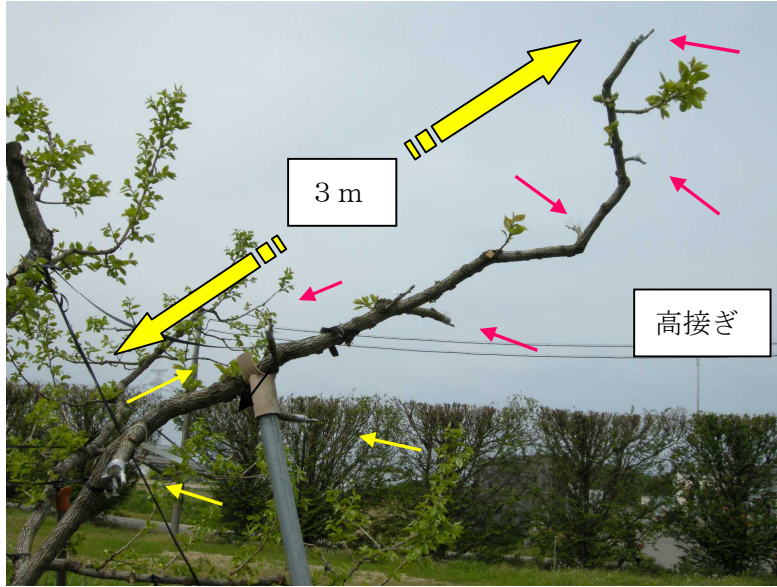


図1 骨格枝における高接ぎ例（8口）

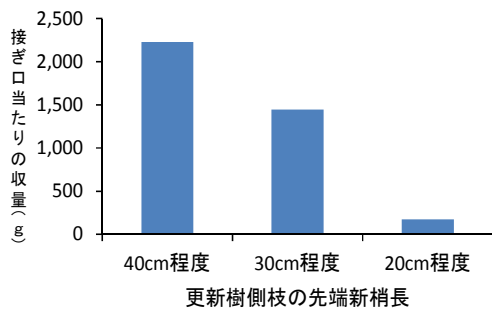


図2 更新樹が接ぎ木後の収量に及ぼす影響（接木3年目）

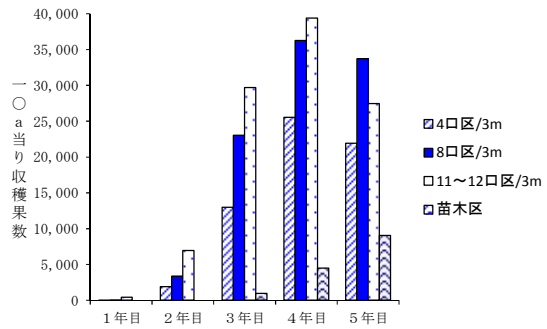


図3 苗木植栽と高接ぎ口数が高接ぎ後の収穫果数に及ぼす影響
（樹冠面積により接ぎ木樹は10a当たり18本、苗木植栽樹は27本として計算した。）

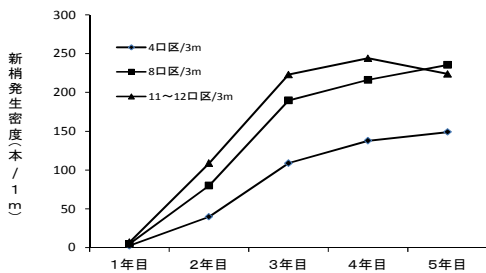


図4 骨格枝1m当たりの新梢発生密度の推移

[その他]

研究課題名：果実の新市場を創成する食べきり・手間なし「ベビーパーシモン」の生産供給技術の開発

予算区分：農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業

研究期間：平成23~25年度

発表論文等：なし